

jaw chatteringがみられた特発性振戦症候群の 犬の 1 例

佐藤 泰紀

あきたこまつ動物病院

はじめに

- ・特発性振戦症候群（全身性振戦症候群）

原因不明の全身の振戦を示す疾患

白色犬種に多くみられるとされてきたが、近年では白色犬種以外でも報告されている

症状は細かい振戦が数日の間に進行し、興奮、緊張などで悪化し、睡眠時には減弱する

一般的には体幹や四肢の振戦が主症状であることが多い

- ・jaw chattering

特発性振戦症候群の症例において稀にみられる顎をガチガチさせる症状

症例

- 雑種犬
- 未避妊雌
- 1歳7ヶ月齢

主訴

2～3日前から痙攣している

身体検査

- 体重 8.1kg
 - 体温 39.1°C
 - 聴診 異常なし
-
- 顎、眼瞼の痙攣様症状、顔面の筋肉の引きつり、前肢のつっぱり等が認められた
 - 意識状態:清明

血液検査

WBC	8700/ μ l	Tp	6.4g/dl	ALT	50U/l
RBC	965 $\times 10^4$ / μ l	Glu	121mg/dl	GGT	6U/l
Hb	18.0g/dl	BUN	23.0mg/dl	ALP	48U/l
Ht	55.8%	Cre	0.8mg/dl	Ca	10.5mg/dl
MCV	57.8fl	Alb	3.5g/dl	IP	2.8mg/dl
MCH	18.7pg	NH ₃	27 μ g/dl	CRP	0.7mg/dl
MCHC	32.3g/dl	T-Chol	287mg/dl	CK	69U/l
PLT	21.9 $\times 10^4$ / μ l	T-Bil	0.4mg/dl	Na	149mEq/l
5				K	4.3mEq/l
				Cl	113mEq/l

X線検査

著変なし

超音波検査

著変なし

神経学的検査

- ・ 姿勢反応：異常無し
- ・ 四肢の反射正常
- ・ 脳神経検査：異常無し

治療経過

症状からてんかん発作や破傷風等を疑い、
メトロニダゾール、ジアゼパム、ゾニサミ
ドの投与を行った（第1病日～第11病日）



その後垂直眼振、測定過大が出現し、前肢
のつっぱり、顔面の筋肉の引きつりは消失
（第12病日）



破傷風を疑う症状が消失したため、破傷風
は除外

第12病日

jaw chatteringが認められた

体幹の振戦は軽度



第12病日

眼振が認められた
(主に垂直眼振)



治療経過

興奮時に症状が悪化し、安静時には改善
光や音、接触でも悪化



jaw chatteringを伴う特発性振戦症候群を
疑った

治療経過

MRI検査を提案したが希望されず



試験的にプレドニゾン(2.2mg/kg/SID)の
投与を開始

治療経過(第26病日)

症状が大きく改善

軽度の振戦と
興奮時のjaw chatteringが残る
程度に回復



治療経過

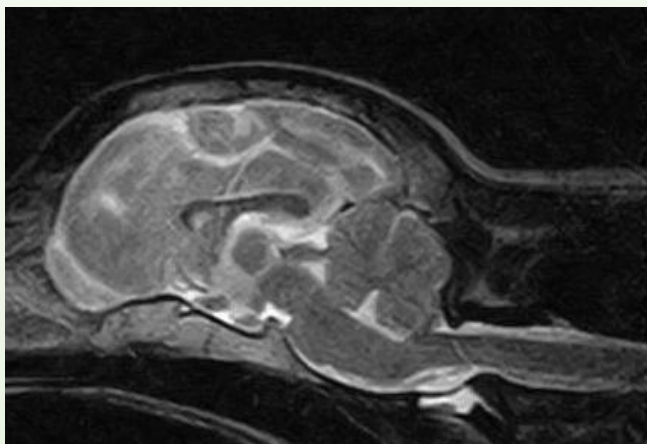
オーナーがMRI検査を希望されたため、第36病日に岩手大学動物病院へ紹介



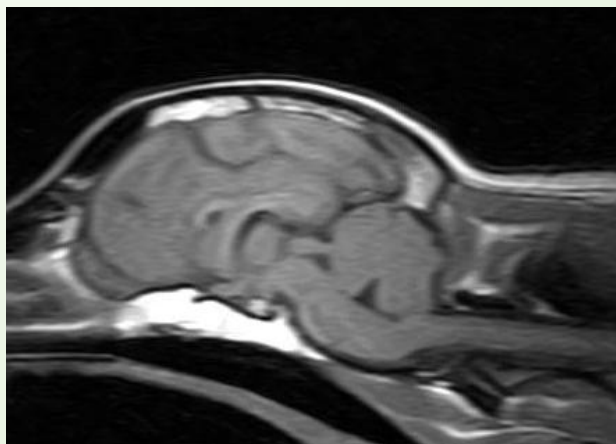
MRI検査、CSF検査を行った

MRI検査

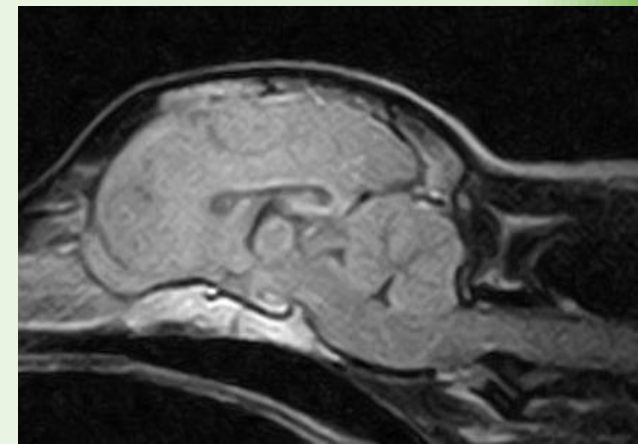
T2強調



T1強調

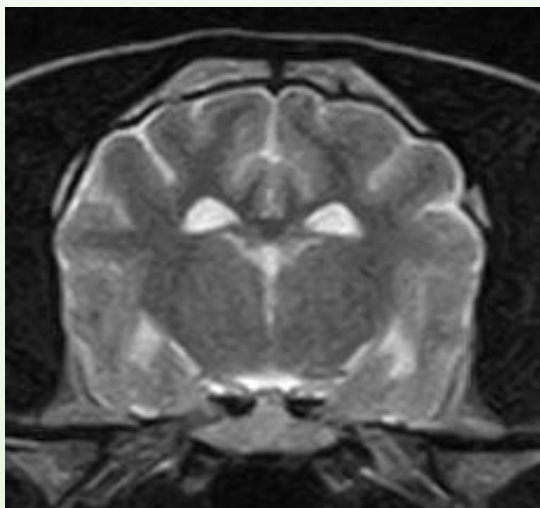


FLAIR

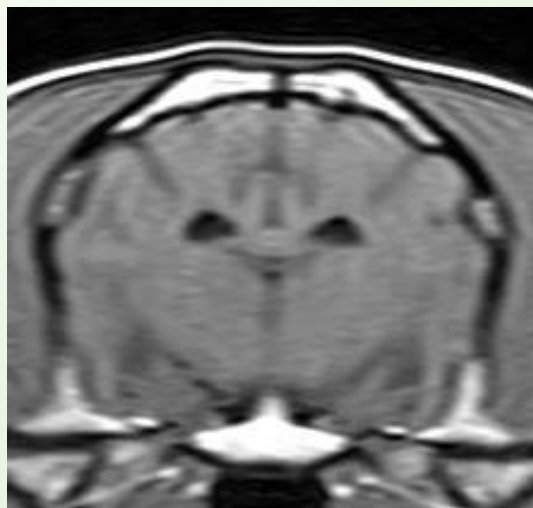


MRI検査

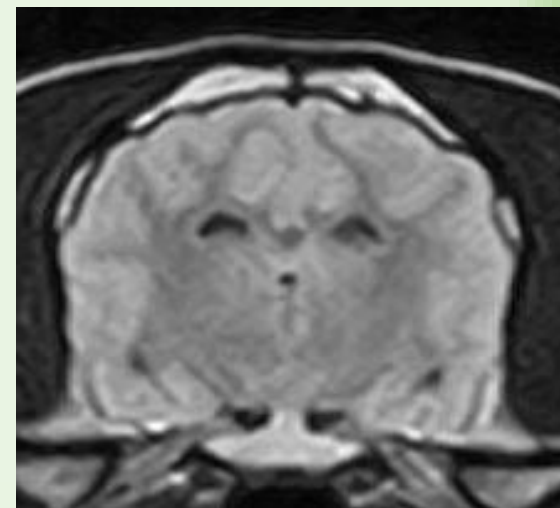
T2強調



T1強調



FLAIR



異常は認められなかった

CSF検査

大槽穿刺により採取

色調：無色

混濁：無し

TP：9.3mg/dl

細胞：無し

細菌：陰性

ジステンパーウイルス抗原：陰性

ジステンパーウイルス抗体：低抗体価

診断

特発性振戦症候群

治療方針

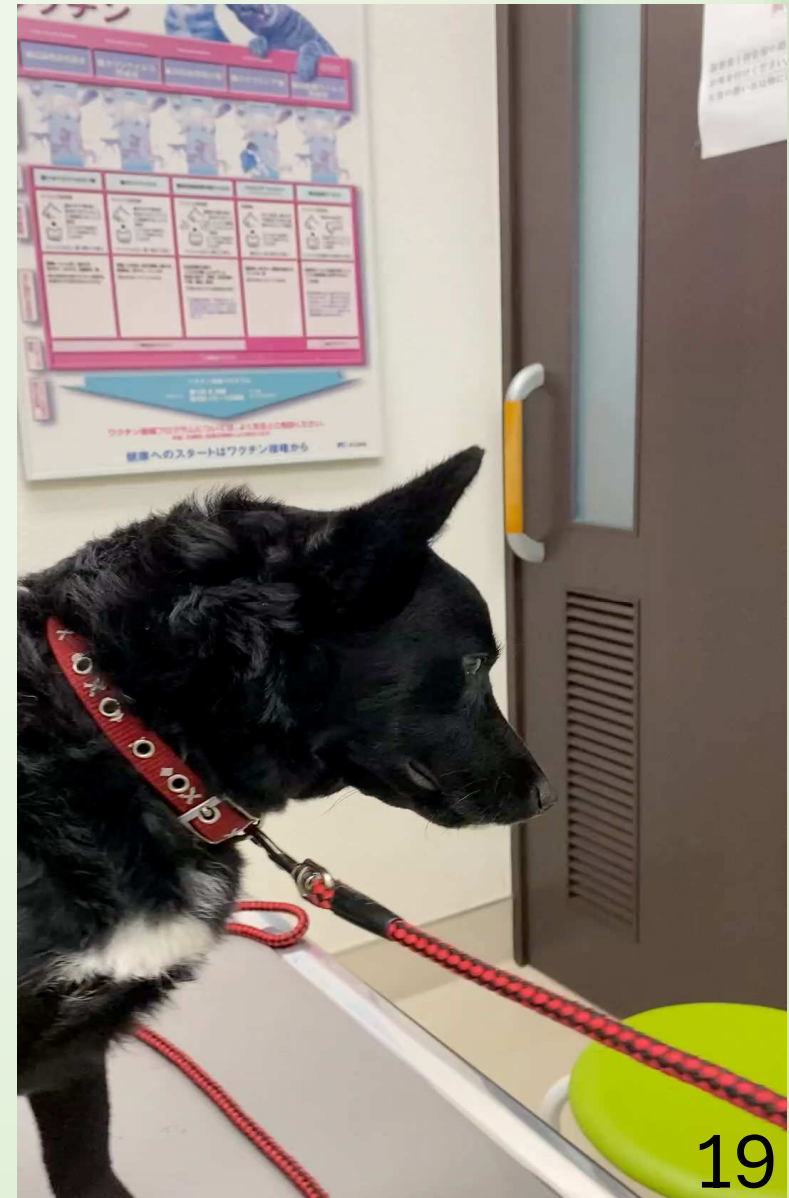
ステロイドによる治療の継続

治療経過

症状の改善が認められたため、プレドニゾロン、ゾニサミドを漸減

第347病日にプレドニゾロンを完全に休薬し、経過観察

興奮時のjaw chatteringが残るのみで良好に維持



考察

- ・ jaw chatteringを伴う特発性振戦症候群はてんかん発作等との鑑別が重要

- ・ 特発性振戦症候群は治療反応の良い疾患



早期の検査（可能であれば脳波検査も）により早期診断治療を行うことが重要